

部族民通信

YOUTUBE

神話学 9

へ 5

まとめ

人類学

講座

蜜から灰

最終

2023年10月~24年7月期

部族民通信 人類学講座 レ  
ヴィストロースを読む

神話学 Mythologique

部族民通信 SNS活動  
ホームページ [WWW.tribesman.net](http://WWW.tribesman.net)  
ブログ <https://blog.goo.ne.jp/tribesman>  
XTwitter部族民通信@9pccwVtW6e3J3AF



Claude Lévi-Strauss  
1909~2009  
(Bororo族調査時、1936年)



Mythologique  
神話学 Du Miel  
aux Cendres 蜜  
から灰へ 5  
最終

出会いは仕組まれた、  
文化の「断絶志向」と  
連続を旨とする自然と  
では破滅がまつ



レヴィストロース神話  
学第2巻 « Du miel  
aux cendres » 蜜から  
灰へ 最終の始まり～

# 神話学全4巻 : 生と調理

## 蜜から灰へ

## 食事作法の起源

## 裸の男

レヴィストロース神話学 新大陸神話 全4巻



左から

Le Cru et le cuit 生と調理  
(1964年)

Du Miel aux Cendres 蜜から灰へ  
(1967年)

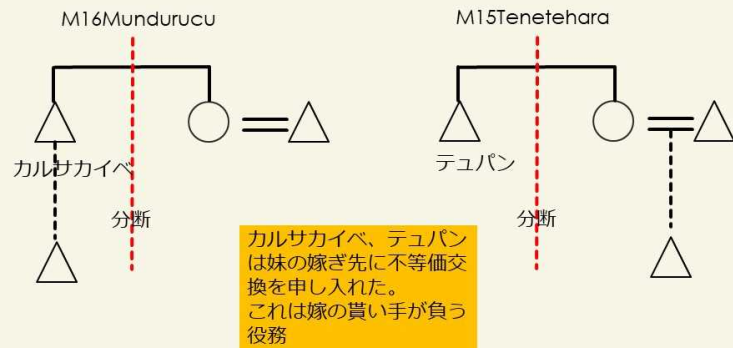
L'Origine des manières de table  
食事作法の起源 (1968年)

L'Homme Nu 裸の男 (1971年)

生と調理：文化の成立、  
文化規則の確立

蜜から灰へ：文化維持の困難さ  
狩りは難しい蜜は取れない。  
自然への歩み寄り

食事作法の起源：自然文化の相克

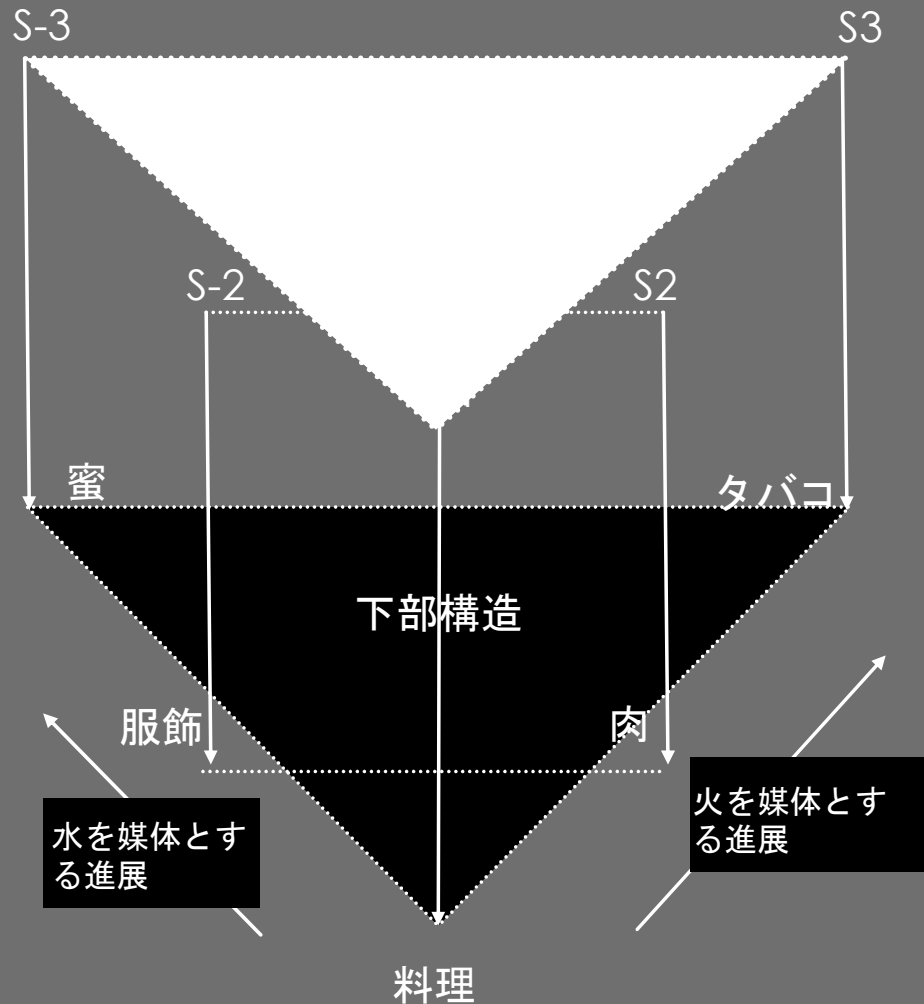


## 参考スライド (左) 第一巻生と調理 描いた文化とその規則破り例

### 女の贈り手 VS 貰い手の不和

婿側が役務を果たさない。俗神カルサカイベが婿一統を懲罰（野豚に変身させた）

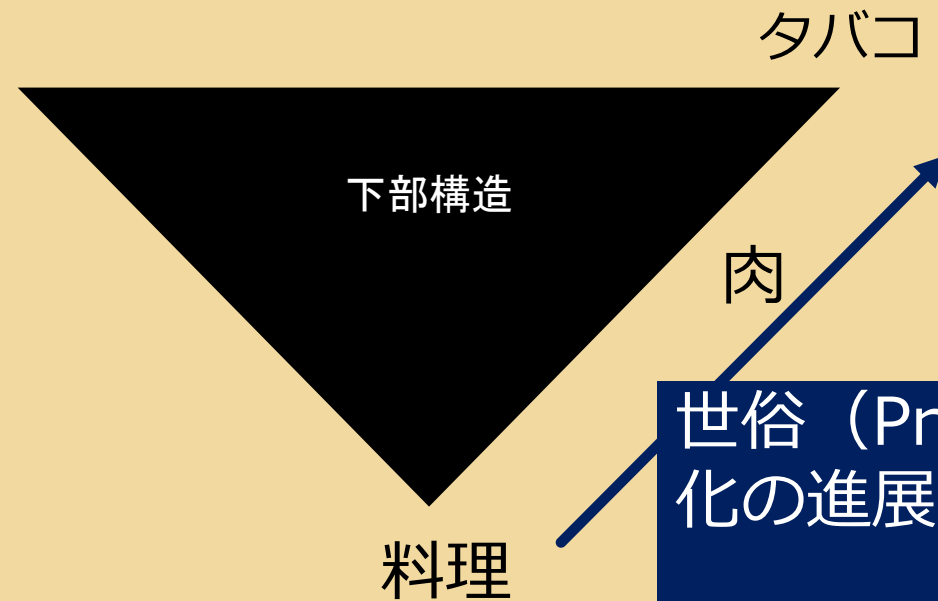
### 生と調理第2回投稿



## 第一巻の伝えかけ 文化の二重構造

上三角形  
S=システム  
上部構造、思想

下三角形  
神話（登場物  
Protagonistes）  
下部構造、形式



世俗 (Profane)世界の文化の進展とは

狩り上手の婿が持ち込む肉、たらふく食える

蜜

下部構造

神聖環境での文化の進展  
とは

祭儀を主宰する  
蜜酒をたらふく呑み  
呑ませる

料理

世俗 (Profane)世界の文化の進展とは

狩り上手の婿が持ち込む肉、たらふく食える

神聖環境での文化の進展とは

祭儀を主宰する  
蜜酒をたらふく呑み  
呑ませる

Simo (蜂の婿)  
Adaba (カエルの婿)

がもたらした文化の極限

Maba の夫  
が味わった、つかの間の  
エデンの園

## 天国は消え去った

直接的原因は文化側の介入

Simo、Adabaは水かけという洗礼を受けたが、これは彼らを自系統に踏み留めるため、肉の分前を他系統に渡さないため（系統の長、父親の）差金と見られる。文化は断絶を旨とする、自然の連続性、言い換えると無関心を断ち切る恣意が見られる。

Maba神話も含め自然文化の同盟破綻の真因は断絶と連続の対峙に遡れる。そもそも起こり得ない同盟が「偶然、Aléatoire、Par hasard」（レヴィストロース）でふと出会い、一旦、この世に天国を現れる、つかの間に消える。

エデンの園、新大陸版

蜜から灰へ まとめを締めくくる神話を：

狂った猟師 (M240 Tukuna族 le chasseur fou 151頁)

Tukunaはアマゾン支流のプトマヨとジャプラ川に挟まれた奥地に住む(住んでいた)。

Un chasseur d'oiseaux avait posé ses lacets, mais chaque fois qu'il venait les visiter, il ne trouvait pris qu'un oiseau sabia. Pourtant, ses compagnons ramenaient beaucoup de gros oiseaux tels que mutums et jacus. Tous se moquaient du chasseur malchanceux que ces railleries plongeaient dans une profonde mélancolie.

紐縄猟をもっぱらとする男。運に恵まれず他の猟師が大型の鳥を幾羽も狩り獲っている日でも、小物一羽 (sabia) 程度したモノに出来ない。同僚達は彼を嘲笑う、その冷ややかさに彼は落ち込んでいた。

Le jour suivant, il n'obtient encore qu'une grive, la rage le prit. Il ouvrit de force le bec de l'oiseau péta dedans et relâcha la bestiole. Presque aussitôt l'homme devint fou et se mit à délirer. Son bavardage n'avait aucun sens : « Il parlait sans arrêt de serpents, de pluie, du cou du fourmiller, etc. Il disait à sa mère qu'il avait faim, et quand elle lui apportait de la nourriture il la refusait en affirmant qu'il avait à peine fini de manger »

その日の獲物は一匹のツグミ(une grive)、男は怒って力づくでウズラの嘴をあけて屁を放ってから鳥を逃がした。その夜から男は気が狂った。とどまりも無く蛇、雨、仕舞いにはアrikuiの頸まで喋った。母親に腹が減ったと嘆き、母がなにがしかの食料を運んだら、たった今食べ終わったところだと皿を押し返した。

神話学 蜜から灰へ 出会いの哲学 続き



挿絵は生と調理から

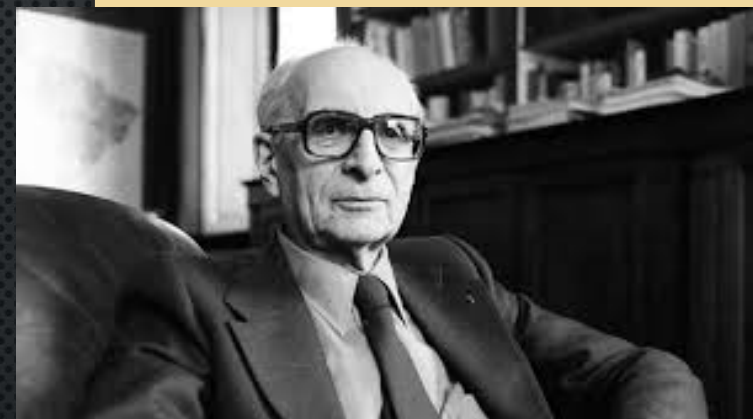
« Quand on vint pour le mettre en terre, il dit : si vous m'enterrez, les fourmis venimeuses vous attaqueront. Mais on en avait assez d'attendre »

埋葬の時にも、俺を埋める気だな、そうなったら毒蟻を差し向けるぞ、お前等を噛みつくぞと脅す。人々はもう十分に長く(埋葬)を待っていたのだからと埋めた。

身体にカビが生えても喋っているのだから男はまだ生きている。神話は、自然を侮辱した男の死に様とはこんなモノだと知らしめる。ウズラー羽では狩にならないのなら、屁を放たず自然に帰せばよい。自然への尊敬を持たず、狩りにあっては成果のみを求めるヒトの性を戒めている。屁の一発で死に至る。共有できたはずの富を喪失perteする例をここにも挙げています。

出会いは偶然、  
偶然に恣意を持ち込む  
人の「文化性」が  
破局をもたらした

レヴィストロース神話  
学第2巻 « Du miel  
aux cendres » 蜜から  
灰へ の了





Mythologique  
神話学 Du Miel  
aux Cendres 蜜  
から灰へ 了